

要約

疎植栽培、速効性肥料の増肥と緩効性肥料を組み合わせた全量基肥栽培により飼料用米の省力・多収生産を実現しました。

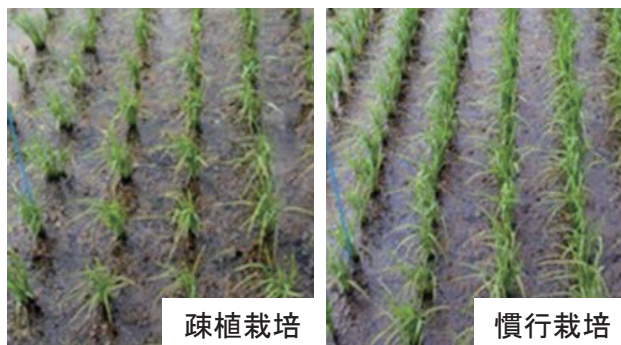
研究成果の概要

1 背景・目的

地域農業は農業労働力の減少や農業政策の転換などから、主食用米だけでなく、複数品目の作付けによる経営の強化が求められています。

そこで、飼料用米について、省力・低コスト技術である疎植栽培と生育中期に行う追肥作業を省略できる全量基肥栽培を組み合わせた多収生産技術の開発に取り組みました。

(注) 疎植栽培とは、通常より株間を広くして植える栽培法



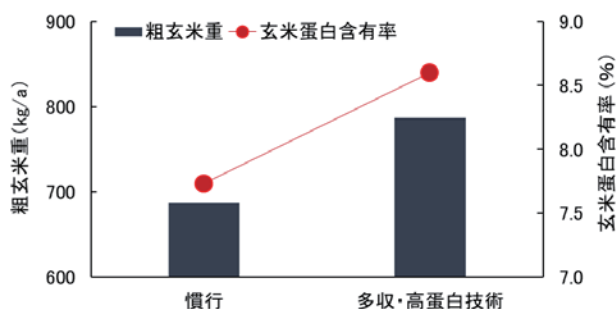
疎植栽培と慣行栽培の植え付け方法の違い
(疎植栽培は単位面積当たりの株数が少ない)

2 内容

- 速効性肥料は、地域の施肥基準の施肥量より4~5kg/10a増肥します。
- 緩効性肥料は4kg/10a程度とします。緩効性肥料の種類は、地域や圃場の地力に応じてLPS60かLPS80のいずれかを選択します。

(注) 速効性肥料とは、肥料成分がすぐに溶け出し、植物に吸収される肥料

緩効性肥料とは、肥料の効き方がゆっくりで、一定期間効果が長続きする肥料



疎植栽培と全量基肥栽培を組み合わせた場合の収量と玄米タンパク質含有率

3 活用等

研究成果は指導参考資料として、飼料用米の生産指導に活用されています。

関連情報

- 飼料用米の移植栽培については、当技術のほか、以下の研究成果が生産指導に活用されています。
 - 水稻品種「みなゆたか」の低コスト生産のための疎植栽培技術（平成23年度）
 - 飼料用米品種「みなゆたか」で発酵鶏糞を用いた疎植栽培での化成肥料代替技術（平成27年度）
 - 早生飼料米品種「えみゆたか」の安定多収のための栽培法（平成30年度）